

メンデルスゾーン：幻想曲 嬰へ短調 op.28
「スコットランド・ソナタ」
Mendelssohn: Fantasia in F-sharp minor op.28 "Sonate écossaise"

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第14番 嬰ハ短調
op.27-2 「月光」
Beethoven: Piano Sonata No.14 "Sonata quasi una Fantasia"
in C-sharp minor op.27 No.2 "Mondschein"

シューベルト：ピアノ・ソナタ第18番 ト長調 D894
「幻想」
Schubert: Piano Sonata No.18 in G major D894 "Fantasie"



夢・幻想

小菅 優

“ソナタ・シリーズ”

Vol.2

Yu Kosuge "Sonata Series"

ピアノ・ソナタをテーマに、様々な時代を歩む作曲家の限らない世界に挑戦する新シリーズ

2023年11月14日(火) 19:00
東京オペラシティ コンサートホール

Tuesday, November 14, 2023 at 7 p.m. Tokyo Opera City Concert Hall

料金：(全席指定) 一般¥6,000 学生¥3,000

※学生券はカジモト・イープラスのみの取扱い

一般発売 7/23(日) 10:00~

カジモト・イープラス
050-3185-6728 オペレーター(10:00~18:00)もご選択いただけます。
kajimotoeplus.com

チケットぴあ <https://t.pia.jp> (Pコード 249-379)
e+(イープラス) <https://eplus.jp/>
東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999

主催：KAJIMOTO
協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル

KAJIMOTO

Photo by Takehiro Goto

19世紀ヨーロッパでは大人になる前に旅に出されたい。

そこで情熱に溢れる若者は初めての人生経験をする。未知なる地での体験によってさまざまな感情が激しく迸(ほとぼし)り、その思い出からは美しい幻想が生まれる。

そして苦難に満ちた生い立ちを乗り越え、人生の険しい道のりに悩まされると、想像力に縋(すが)ることもある。人間の想像力は限りない。遠い人を思い焦がれたり、厳しい現実から空想の世界へと逃れることもある。

音楽はそのような夢を蘇らせる。

今回のリサイタルでは、19世紀前半に書かれた3つのソナタを取り上げます。

ロマン派に差し掛かると、作曲家たちはソナタの枠の中で自由な新しい構成を試みていたのがわかります。ベートーヴェンのソナタでいえば画期的な、アダージョによる第1楽章。メンデルスゾーンではアツカで全楽章が一つの曲のように演奏されるソナタ。そしてシューベルトの、ソナタ形式ではあっても全体を貫く夢想的な情緒。これらすべてにそれまでのソナタを覆すような発展を感じます。

リサイタルのプログラムを構想するとき、自分の体験に基づいて考えることがあります。リサイタルのためにスコットランドへ何度か行き、地元の人々や自然に感動しました。そしてベルリン・フィルの定期公演で交響曲第3番「スコットランド」の素晴らしい演奏を聴き、この地からメンデルスゾーンがインスピレーションを得た作品について興味湧いてきました。そうした着想はベートーヴェンをはじめ沢山見られますが、実際スコットランドを旅したのは唯一メンデルスゾーンです(1829年)。幻想曲「スコットランド・ソナタ」(1833)は、その旅が想像できる、詩的な情景が思い浮かびます。第1楽章はペダルを踏んだままアルペジオを用いたイントロダクションで始まり、懐かしむような幻想が浮かび、最後の長いペダルの指示は、夢のような曖昧さを漂わせています。続く第2楽章はいかにもメンデルスゾーンらしい妖精たちが会話しているかのような繊細で可憐な対話。第3楽章は交響曲の終楽章にもつながる、戦場を思わせる激しい楽章です。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ作品27-2「月光」(1801)は何度演奏しても謎が深まる作品です。ベートーヴェンが付けたのではないこの有名なタイトルよりも、彼自身のQuasi una fantasia(幻想曲のように)というサブタイトルに注目していただきたいと思います。葬送行進曲につながるリズムやモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の冒頭シーンを思い起こさせる三連符と同時に、遠い彼方の人を思うような雰囲気や漂わせる第1楽章、続くメヌエットにかすかな光が差す、嬰ハの異名同音である変二長調、そして感情の嵐のような激しい3楽章。全体から一つのストーリーを感じさせ、緩徐楽章で始まるという自由な構成からはベートーヴェンならではの進化を感じます。

後半はシューベルトの壮大なソナタD894(1826)。第1楽章に「幻想曲」というタイトルをつけたのは出版社だったにしても、幻想という言葉ほどこの楽章に似合うものがあるのでしょうか。空想の中でのみ実現する幸福な瞬間から、突然現れる痛みや苛まれた展開部のfffまで、人間の弱さを痛感させられます。それは自分の幻と遭遇したかのように、現実と非現実を彷徨っている世界。自身のリートで歌われる一場面を想像できる、まるで語りかけてくるような第2楽章、ウィーンの香りを漂わせた第3楽章メヌエットの答えが出ない対話と美しいトリオは孤独さを秘めています。牧歌的な第4楽章ではやっとな楽園にたどり着いたのでしょうか。

夢、幻、幻想。現実とはかけ離れた、心の奥深くの世界を、この3つの素晴らしいソナタと共に探求していきたいと思います。

(小菅 優)



小菅 優 (ピアノ) YU KOSUGE, Piano

2005年カーネギーホールで、翌06年にはザルツブルク音楽祭でそれぞれリサイタル・デビュー。ドミトリエフ、デュトワ、小澤らの指揮でBBC響やNDRエルプフィルと共演。10年ザルツブルク音楽祭でポゴレリッチの代役として出演。その後も世界的な活躍を続ける。14年に第64回芸術選奨音楽部門 文部科学大臣新人賞、17年に第48回サントリー音楽賞受賞。録音は、ソニーから発売している『藤倉大:ピアノ協奏曲<インパルス>&WHIM/ラヴェル:ピアノ協奏曲ト長調』(第77回文化庁芸術祭優秀賞受賞)をはじめ数多い。2017年から4年にわたり、4つの元素「水・火・風・大地」をテーマにしたリサイタル・シリーズ『Four Elements』を開催し好評を博したほか、様々なベートーヴェンのピアノ付き作品を徐々に取り上げる企画「ベートーヴェン詣」にも取り組む。2023年よりピアノ・ソナタに焦点をあてた新プロジェクト「ソナタ・シリーズ」を開始。

ブラームスの滋味あふれるふたつのチェロ・ソナタを実力派ふたりの演奏で聴く。

ベネディクト・クレクナー & 小菅 優

ブラームス:チェロ・ソナタ(第1番ホ短調作品38 & 第2番ヘ長調作品99)



ベルリンを拠点に世界で活躍するピアニスト、小菅優。大指揮者サイモン・ラトルやダニエル・バレンボイムからも愛されるドイツの若きチェリスト、ベネディクト・クレクナー。ふたりがじっくり取り組んだブラームスの滋味あふれるチェロ・ソナタ2曲。ブラームスが30代前半で作曲した冷厳な印象を聴き手に与える第1番と、それから21年後、交響曲第4番も書き終えたあとの創作後期に書かれた明るく男性的な第2番。作曲された時期も性格も違うこの2曲を、小菅とクレクナーはその世界を慈しむようにじっくりと歌い上げていきます。

【演奏】ベネディクト・クレクナー(チェロ)、小菅 優(ピアノ)
【録音】2021年7月20-23日 SWRスタジオ カイザー・スラウテルン

絶賛発売中

定価 ¥2,860(税抜価格¥2,600) CD ● SICX30179

48kHz/24bit
ハイレス配信

Sony Music Japan International



- お車で越越しのお客様は東京オペラシティビル 駐車場料金の1時間分割引制度をご利用頂けます。
- やむを得ぬ事情により内容に変更が生じる場合がございますが、曲目変更などのために払い戻しはいたしませんのであらかじめご了承願います。
- 団体料金の設定のある公演もございます。詳しくはお問合せください。
- 未就学児のご入場はご遠慮いただいております。
- ご来場の皆様に安心して聴きいただけますよう、感染症の防止と予防のための適切な対策に今後とも引き続きご協力をお願い申し上げます。

KAJIMOTO

〒104-0061 東京都中央区銀座6-4-1
東海堂銀座ビル5階
kajimotomusic.com

YouTube “kajimotomusic” で検索!

@kajimoto_News

@kajimotomusic